

聖ルカ福音書第17章5-10節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音書は、「使徒たちが『わたしどもの信仰を増してください』と言った」という書き出しになっています。信仰を増してほしい、信仰がもっと深いものでありたい。このような願いは、真面目に信仰生活に取り組もうとしている者であれば、だれもがそのように望む願いであると思います。

自分の信仰がもう少し深まれば、聖書の語ることがもっとよく分かるはずだ。神さまをもっと身近に感じられるのではないか。いろいろな問題が起きてきても、あわてふためくことなく対処することができるだろう。教会の働きや神さまへの奉仕に、喜びをもって参加できるようになるだろう。そのような思いを抱くからです。

信仰をより強いもの、確かなものにしてほしいというのは、わたしたちにとっても心からの祈りであるでしょう。

この願いに対して、イエスさまは、「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」と答えておられます。わずかな信仰、ごま粒よりも小さなからし種ほどの、ごくわずかな信仰があれば、不可能であるように思われることが可能となるのだと、イエスさまは答えておられるのです。信仰というのは、多いか少ないかという量で計るような問題ではないということです。

使徒たちは、自分たちには既に信仰があるという前提で求めています。今ある信仰に、更につけ加えて信仰を増してくださいと願いました。しかし、イエスさまの答は、小さな信仰があれば、それで十分だということです。

言い換えれば、使徒たちにはからし種一粒の信仰すらない、とイエスさまは仰るのです。しかし、そのように言って、使徒たちをバサッと切り捨てようとするのではありません。小さな信仰を獲得するようにと、励ましておられるのです。

使徒たちは、何故、このような願いを発したのでしょうか。ルカは、この願いをしたのは、「使徒たちだ」とわざわざ断っています。今日の箇所直前には、イエスさまの教えが記されていますが、そこでは、「イエスは弟子たちに言われた」と書き始めています。

ルカ福音書の記者は、直前の箇所では「弟子たち」という言葉を使ったのに、今日のところでは、「弟子たち」とは言わずに、それに変えて「使徒たち」という言葉を使いました。この願い、信仰を増してくださいと願ったのは、イエスさまの周りにいた多くの弟子たちではなくて、使徒たちだったということです。この願いは、特別に選ばれた使徒たちの願いであることを、敢えて言おうとするのです。

イエスさまは、弟子たちの中から12人を選んで「使徒」と名付けられ(6:13)、特別の使命を与えられました。使徒とは、「遣わされた者」という意味ですが、イエスさまによって選ばれ、この世に派遣され、イエスさまの宣教と復活の証人として、福音を宣べ伝える使命を与えられました。そのために全権を委ねられたのが、使徒たちです。

その使徒たちは、決して平穩な教会生活を送っていたわけではありません。様々な問題に直面しました。その中で大きな問題は、教会の中で起きる罪に対して、どのように対処すべきかということです。使徒たちが指導していた教会の中で、教会の交わりを損ないかねないような、困難な問題が生じてきたのです。

その1つは、教会の交わりの中に入って間もない人々が、つまずいてしまうようなことが起こったのです。その原因は、長年、教会生活を送り、信仰に関する知識も豊富な人々の言動にあるのです。成熟した信仰を持っている人々の姿が、洗礼を受けたばかりの人のつまずきの原因となってしまったのです。

それがルカの教会では具体的にどのような問題であったかは述べられておりません。しかし同じような問題がコリントの教会でも起きました。その時にコリントの教会の人々は、教会を建てたパウロに対して指示を仰いでいます(Ⅰコリント8章)。それは、偶像に供えられた肉を食べても良いかどうかという問題でした。信仰の成熟した人々は、そもそも偶像の神などはないのだから、偶像の神殿で食事の席に着いたところで、まことの神さまを冒瀆することでも汚すことでもないと言って、自由に食事を楽しんだのです。

しかし、長年、偶像礼拝に馴染んできた習慣を捨てて悔い改め、唯一の神さまを礼拝するようになった新しい信者にとっては、偶像に供えられた肉を食べることは、大変抵抗のあることでした。かつての偶像礼拝に戻ってしまうことではないのかと、疑いが生じました。そこにつまずきが起るのです。

パウロは、知識豊かな人々の「自由な態度が弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい」と勧めています。また、「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」といって、自分の自由を強調するよりは、他の人々に対して愛をもって配慮することを優先させることを勧めています。小さな人々に罪を犯させるようなことをするよりは、「首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましだ」(ルカ 17:2)と言うのです。

使徒たちの教会の2つ目の問題は、教会の信者同士、人間関係の中で起きる罪に関してです。使徒たちはそのことに心を痛めました。教会の中で起こったことを、見て見ぬ振りをして済ませるようなことはしませんでした。罪を犯した人を戒めたのです。しかし、それは懲戒することが目的ではありません。罪を犯した人に罰を加えて、被害者の恨みを晴らしたり、損害を償わせることに主眼があったわけではありません。

そうではなくて、悔い改めを求めたのです。これは痛みを伴うことです。人に忠告をしたり注意を与えたりすることは、それによって自分も傷つくことを覚悟しなければできません。そうであっても戒めなければならない。それは使徒たちが罪を犯さない人間だったからではありません。使徒たちには、ほかの人とはちがう権威や権限が与えられているからでもありません。教会という組織を監督し、秩序を維持する責任があるからでもありません。

そうではなくて、罪の赦しの福音を宣べ伝えることが、使徒の使命だからです。神さまの赦しの愛に生かされていることを、だれよりも知っているのが使徒たちです。その赦しに、自ら生きることなくして、使徒としての使命を果たすことはできません。そうでなければ、宣べ伝えておきながら、自分は失格者とならざるを得ない

からです(I コリント 9:27)。

今日の箇所の直前にも、「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい」というイエスさまの勧めのみ言葉があります。使徒たちは、教会の問題に直面して、このイエスさまのみ言葉を思い起こしたであります。問題にどのように対処しようかと思ひ悩む中で、福音とは何かを問い直したのです。そして、罪の赦しこそが、福音そのものであることを改めて教えられたのです。

だからこそ、罪の赦しのために、信仰を増し加えて下さいと願ったのです。人の罪を赦すこと、その困難さを使徒たちは味わったのです。その難しいことが、自分たちの教会の中で可能となるように、信仰を更に加えて下さいと祈らざるを得なかったのです。

イエスさまは、その祈りに対して、からし種一粒の信仰で十分だと答えられました。小さな信仰がありさえすれば、最も困難な罪の赦しが可能となるとお答えになったのです。

そして続いて、「取るに足りない僕」のたとえを語られました。それによって、信仰の態度とはどのようなものであるかを教えようとされたのです。

このたとえは、絶対的な力を持っている主人と僕、奴隷と言っても良いでしょう、その関係について語られています。奴隷が主人から命じられたことを全部果たしたからと言って、それでほめられるわけではありません。感謝されるのでもありません。ましてや、報酬を期待するなどとはとんでもないと言うのです。取るに足りない僕だと言うほかないと言うのです。神さまとわたしたちとの関係はそのようなものなのです。お恵みは無償でもって与えられるのです。

わたしたちには、自分の中に赦しを可能とするようなものは何もないのです。既に自分の中にあるものに、更に信仰をつけ加えれば赦しが可能になるのではありません。赦しが起こるのは、正に神さまの恵みによるほかないのです。全く何もない自分、空っぽのわたしたち、そのわたしたちが願うべきことは、「信仰を増してください」ではなくて、「からし種一粒の信仰を与えてください」という祈りなのです。それのみがわたしたちのなすべきことなのです。

教会の中に様々な問題が持ち上がるとき、その中でわたしたちは使徒たちに倣って改めて主のみ言葉を学ばなければなりません。信仰を求める機会としなければなりません。これは恵みの時なのです。からし種一粒の信仰を与えて下さいと祈る時なのです。